

## 優秀作品

北九州市 (P.N)桃雪

十日ほどの夏休みで平戸に帰省した際、天気が荒れて楽しみにしていた海水浴ができなくなった。よし、こんな時は図書館だ！と家族でドライブに出かけた。途中道に迷いながらもなんとか到着。館内に入った途端、娘の目がキラキラと輝きだす。真新しい館内に真新しい絵本がずらり。窓の外は絶景のオーシャンビュー。テンション爆上がりでぴょんぴょんと跳びはねる娘は森を駆け巡るウサギのよう。

図書館の中では走らないでね、静かにね、と釘を刺しつつ、私は母の貸出カードを作るべく、カウンターに向かい、図書館スタッフから衝撃の説明を受けた。「日本国内に居住する人」は、「冊数の上限なく」「年末年始と特別整理期間以外、毎日」利用できる…だと!?平戸市民じゃなくてもいいの?ちょっと言ってる意味が分からないんですけど。

「貸出上限がない」なんて、聞いたことがない。そんなことが許されるのか。思わず、本当ですか?本当に何冊でもいいんですかと聞き返してしまった。ええ、大丈夫ですよ。とこともなげに返され、しばらく思考停止。

事態をよく呑み込めないまま、カードをもらい、館内を見回すと、図書館にはだいぶ違和感のあるスーパーのショッピングカートとレジかごを見つけた。そうか、これがあれば、本の重さを気にせずいくらでも本が入れられるな…しめしめ。

それから後は、もうドーパミンが大放出祭りである。気になる本は、どんどんレジかごに入れていく。とにかく本の状態がきれいだ。それだけでもテンションが上がるのに、お気に入りの作家の本だって無制限。大好きな栗林慧先生の特集コーナーまである。ああ、天国ってここだったんだ。夢見心地でショッピングカートを押す。一時間後、上下ふたつのレジかごには大量の本が入れられ、カウンターのスタッフの度肝を抜くことになる。

箱、出しましょうね…これまでも箱で借りた猛者がいるのか、すぐにカウンターの奥から丈夫そうな箱が出てきた。底が抜けないようしっかりガムテープで補強してある。抱えてみるとみっちり箱に収められた絵本の重さに現実に引き戻される。四十三冊。いくら何でもやりすぎたか。この箱、確実に娘より重い。これ、帰るまでに全部読めるかしら。

しかし、私の不安は良い方向で裏切られた。たった二日で娘は全て読み切ってしまったのである。しかもおかわり希望。むさぼるように活字を追う娘の姿に、かつての自分を重ねながら願う。将来、私が老いて、何ひとつ教えられなくなっても、本が、図書館が、一生の友として娘の人生を支えてくれますように。

最後になるが、破天荒とさえ思えるこの図書館事業を推し進めてくださった平戸市長と関係者の皆様、そして週一の定休日や盆休みもなくシフト調整しながら働いてくださっているスタッフの皆様、厚く感謝申し上げます。

来年の夏、またお会いいたしましょう。